

〈自著紹介〉

『マルチグラフト——人類学的感性を移植する』  
神本秀爾・岡本圭史（編著）、集広舎、2020年2月

神 本 秀 爾



## 1. はじめに

本書『マルチグラフト——人類学的感性を移植する』は、2019年1月に上梓した『ラウンド・アバウト——フィールドワークという交差点』の第二弾として編まれたものである。前作に引き続き、主な執筆陣は若手の文化人類学者であり、現役の研究者19名による21編のエッセイと、現在は研究・教育とは関わりのない職に就いている2名による2編のショートエッセイから成っている。前作との大きな違いは、前作が「フィールドワーク経験の共有」に重きを置いていたのに対して、本書は一步踏み込んで、「文化人類学（者）的な発想や感性の共有」を目指しているという点にある。以下に、本稿では本書の趣旨と内容を簡潔に紹介していきたい。

## 2. タイトルとコンセプトについて

はじめに、本書の主題である「マルチグラフト」という言葉について述べたい。この「マルチグラフト」とは園芸用語の多品種接ぎ（multi-grafting）から直接的に着想を得た造語である。一般的に多品種接ぎとは、ベースとなる木々の幹や枝に別の植物を接いでいくもので、一本の木から咲く多品種の花を楽しんだり、果実を収穫したりするためにおこなう行為を意味している。本書が試みようとしているのは、読者が新たに接ぎ木する感性のひとつの候補として、人類学的な感性を提案するという点である。

このように植物のアナロジーを人文的な発想と結びつける行為自体は目新しいものではなく、Deleuze & Guattari [1980] の *Mille Plateaux: Capitalisme et schizophrénie*（邦題：『千のプラトー』）で広く知られたリゾーム（根茎）概念を知る読者には、一見とても古臭く、むしろ逆行しているように映るかもしれない。しかし、本書が立脚しているのは、私たちの身体が一本の木と同じような物理的な存在であり、ほとんどの人間が成長していく過程において、幹や根にあたるような中心的なアイデンティティを強固にしていくという素朴な現実認識の次元である。

中心的という言葉は当然のように周縁的という言葉を引き起こす。わたしたちはその人生を通じ、さまざまな異種の感性と出会っていくが、その過程でそれらの一部を自身にとって「自然」なアイデンティティに対する周縁的なものとして受け入れながら自身の感性を更新することがある。感性とは言語の手前にある表現しがたい存在であるが、むしろそれ故に、そのような状況においても感性の同期は起こり得るというのが編者の希望であり期待である。このような認識のもとづいて、本書では人類学的感性について「たとえ一緒に時間を過ごしても理解しきれないと思えない他者を、その差異を含めて受け止めようとする、力強くも謙虚な姿勢に裏づけ」[P.4] られるものとして、他者と向き合う構えを通じて生み出されるものと意味づけている。

そして、そのような構えを可能にするのは「わからなさこそが、他者の豊かさであり、人間の豊かさ」[P.4] だという人間観である。

### 3. 中身について

本書は個々のエッセイが重きを置いているトピックを元に、「集まる」「暮らす」「伝える」「信じる」「関わる」という5つのパートと、それらとは独立したショートエッセイの合計6つのパートから成っている。とは言え、これらの分け方は便宜的なものであり、すべてのエッセイは独立して完結しているのだから、どこから読んでも良いようにできている。個別の章立ては以下の通りである。カッコ内は紹介されるエピソードの舞台となる国や地域を指している。

#### 第Ⅰ部 集まる 国家・アート・アイデンティティ

見える境界・見えない境界——食と身体感覚からみるエスニシティ [ブラジル] 安井大輔

難民として生きる——国籍との抜き差しならぬ関係 [インド・ネパール] 山本達也

社会を反映しない歌——ある女性と歌と周辺性について [台湾] 田本はる菜

未来を照射する過去——ドレッド・ロックスと縄文タトゥー [ジャマイカ・日本] 神本秀爾

#### 第Ⅱ部 暮らす 環境・災害・時間

エコ暮らしのスイヒリ農村——ボンディのココヤシの葉利用 [タンザニア] 高村美也子

自然災害とともに生きる——ソロモン諸島村落部の暮らしから考える日常性 [ソロモン諸島]

藤井真一

季節がかわるとき——初物献上のゆくえをめぐって [ミクロネシア] 河野正治

#### 第Ⅲ部 伝える 教育・歴史・記録

子にかける夢と迷い——「教育」を再考する [ブルキナファソ] 清水貴夫

記述された歴史を語り伝える——外国人による歴史叙述の活用 [エチオピア] 吉田早悠里

文書のなかの固有名——インデックスとしての人格と地格 [ブルキナファソ・フランス] 中尾世治

集合的人格における融即と責任——レヴィ=ブリュルとモース [日本] 中尾世治

#### 第Ⅳ部 信じる 信念・巡礼・改宗

現代の魔女たちの魔法 [イギリス] 河西瑛里子

アニメの聖地巡礼のグローバル化 [イギリス・ヨーロッパ] 河西瑛里子

重層的なフィエスタ——誕生祝から巡礼まで [メキシコ] 山内熱人

信徒達の思索について [ケニア] 岡本圭史

狩人とアフリカミツバチ [マリ] 溝口大助

#### ショートエッセイ

機内食を初めて食べた少女の話 山野香織

メディアで働いても文化人類学から離れられない理由 高田彩子

#### 第Ⅴ部 関わる 身体性・ケア・コミュニケーション

表現を通して「知る」ということ——障害がある人たちとの演劇制作の現場から [日本] 宮本 聡

「古い」とは何か、その問題とは何か——一人暮らし老年者の人類学的調査研究からみえて

きたもの [沖縄] 菅沼文乃

普遍的な納得のあり方を求めて [バヌアツ共和国] 大津留香織

異質なものを引き受ける身体 [日本・中国] 小西賢吾

「共に在る」感覚の再構成——チベット系民族の対面とモバイルメディアにおける関わり [インド・日本] 中屋敷千尋

#### 4. おわりに

本書に収録されているそれぞれのエッセイは、フィールドの人々やフィールドで起きている現象を理解するために理論や知識、経験にもとづく判断をそれこそ接ぎ木することで、可能な限り多くの人と共有できるように編み直したものである。编者として本書を再読して実感するのは、それぞれのエッセイで用いられている表現や紹介される概念、エピソードを通じて自身が持ち合わせていなかった、あるいは言語化することをこれまで試みなかった感情や感覚に出会えたという喜びである。そしてすぐさま、フィールドの人々の側では、各執筆者たちとの出会いはどのようなものとして経験されストーリーとして共有されていったのだろうかという新たな疑問も湧いてくる。

かつて、石原は自分とは異なる他者にも自分と同じような内面があると感じる志向性を「内面の共同体」[石原2009：70]と呼んだが、本書が開く可能性のひとつは、この「内面の共同体」のメンバーシップを、筆者と読者にとどまらず、フィールドの人々にまで拡張し新たなコミュニケーションを発動させようとするところにあると言えるかもしれない。

#### 謝辞

本書の出版に際しては、令和元年度久留米大学文学部教育研究振興資金の助成を受けました。記して感謝申し上げます。

#### 引用文献

石原千秋 2009『読者はどこにいるのか——書物の中の私たち』河出書房新社。